

ボロニスキー自然保護区におけるコウノトリの営巣調査

1 自治体名

ハバロフスク地方

2 発表者名

コルキン・エヴゲーニー Korkin Evgeniy (アムルスク市第3号総合学校)

3 活動名

営巣のモニタリング、コウノトリ保護のための活動

4 活動期間

2012年5月～6月

5 活動場所

ハバロフスク地方、ボロニスキー自然保護区

6 活動参加人数

17人

7 活動を始めた経緯

コウノトリは、絶滅危惧種の1つで、この種を保護するために活動を始めた。

8 発表要旨

ロシア連邦ハバロフスク地方の中心に位置している湿地にボロニスキー自然保護区がある。この自然保護区において「フォルミカ」という青少年環境探検隊が、コウノトリの営巣を研究した。

コウノトリは希少で、ハバロフスク地方のレッドリストに記載されている絶滅危惧種である。コウノトリは人の住まいを避けて、広い沼の中の小さい森、一本の木がある湖、小川、かつての川床や川の分岐点で巣を作っている。主に魚、蛙、水に生息している無脊椎動物等を食べている。

ボロニスキー自然保護区では、巣から2、300m～2km程度離れた場所で営巣を調査した。

保護区にあるすべての巣には番号が付いている。2012年5月～6月の間に3つの巣の視覚観測を行った。人工木製支柱にある10号の巣、人工鉄筋支柱にある77号の巣、かしの木の上にある16号の巣です。観測の結果は研究ノートに記録した。

16号の巣は、以前サギとカワウの生息地だった古いカシの木の5.5mの高さに位置している。巣の直径は120cmで、高さは70～80cmである。調査中、コウノトリはしっかり抱卵していた。調査によると、コウノトリは交代で卵を温め、巣を殆ど離れることがない。

300～350mの距離から、望遠鏡と双眼鏡を使用して、コウノトリを驚かさないように完全な沈黙を守って、調査を行った。

77号の巣は高さ12mの鉄筋支柱にあった。約150–200mの距離から調査を行った。木の繁みで作った調査地点から営巣地を全体的によく見渡すことができた。コウノトリを不安にさせないために、それ以上近づくことを止めた。

視覚観測によると、77号の巣にコウノトリが住んでいる。一羽の鳥はしっかり巣に座り込んでいる。巣の直径は180–200cmで、使用されている材料は様々な太さの枝である。

毎15分–30分ごとに定期的にもう一羽の鳥が飛んできて、巣にいるコウノトリに餌を与えていた。その鳥が巣の縁にいる時間は約3–4分である。

巣にいるコウノトリは時々立ち上がって、羽をほぐしながら広げている。くちばしで巣の中に何かを触っていた。巣の中におそらく卵があると推測した。けれども、以前の調査結果によると、この時期には、もうひながかえっているはずである。巣作りに時間がかかり、春の到来も遅かったためなのか、おそらく、このペアが卵を産むのが遅くなったからだろう。

もう一羽のコウノトリは私たちがいる観測地点の上に二回ぐらい輪を描くように飛んだ後、巣に居たコウノトリと交代した。巣を離れたコウノトリは私たちに警戒して、観測地点の上に高く飛び始めた。心配をかけないために、私たちはその場を離れた。

餌取り場は巣からあまり離れてない。主な餌は湿地に大量に生息している小魚、両生類、無脊椎動物等である。

観測した結果で、コウノトリが交代で卵を温めること、慎重で観察力の鋭い鳥であることが確認された。

ボロンスキー自然保護区では、2012年に51のコウノトリの巣が確認された。その中、15の巣は人工の支柱（12の巣がカラマツの支柱に、3の巣が三脚のような鉄筋支柱に）に作られている。

実施した観測から、ボロンスキー自然保護区におけるコウノトリの現在の生息状況が満足すべきものであることが確認できた。

コウノトリは安全で周りが見渡しやすい高い木にも、鉄筋支柱にも進んで巣作りをする。

自然の中のコウノトリを保護するためには、自然保護区や国立公園を増やすこと、人工支柱を設置すること、森林火災防止を強化することが必要である。